sendai-city chronicles communication paper.

せんだい 市史通信

第11号
仙台市博物館
市史編さん室

仙台市電119号車（秋保町湯元）

電車の内部

モノがたり 仙台

長崎に渡った仙台市電

写真の電車は秋保温泉入口に架かる覗橋（のぞきばし）の近くに昨年から置かれているもので、大正15年（1926）から昭和51年（1976）までの50年間、仙台市民の足として親しまれた仙台市電の1両です。

通称100型と呼ばれるこの車両は、昭和23年（1948）から昭和27年（1952）まで合計24両が購入され、順番に101号車から124号車と名付けらたもののうちの119号車にあたります。100型は、それまでの主力車両の定員が40名なのに対し、80名と倍増されており、戦後の輸送力増強に貢献しました。

仙台市電は昭和51年（1976）3月に廃止されますが、そのとき119号車を含む5両の100型が長崎電気軌道株式会社に譲渡され、長崎の軌道幅に合わせるための改造が行われた後に、長崎市内を走ることになります。

これらは長崎では通称1050型と呼ばれ、1051号車から1055号車までの番号が付けられました。ちなみに1050型の名称は、仙台（センダイ＝1000番台）からやってきて、昭和50年代に運転を開始したことから付けられています。

5両のうち、1052号車と1055号車は既に廃車となり、現在は1051号車（仙台市電の117号車）のみが現役として長崎市内を走り続けています。1054号車（121号車）も既に引退していますが、こちらはオーストラリアのシドニー路面電車博物館に引き取られ、今でも実際に走行させることもあるようです。

そして長崎市電1053型が冒頭の仙台市電119号車にあたります。こちらは平成12年（2000）12月まで現役で走り続け、翌年の8月に仙台に帰ってきています。その後しばらく市内の倉庫に置かれていましたが、昨年11月に一昼夜にわたる大移動のすえ、現在の場所におさまることになりました。

設置当初は所々にさびが残っていた車体も、その後防水処理や内外部の塗装が施されてきれいになっています。

温泉地に電車という組み合わせは不思議に思われるかもしれませんが、ここが秋保電鉄の終点秋保温泉駅の跡地と聞けば、なるほどとうなずけるでしょう。

なお『仙台市史　資料編5　近代現代1　交通建設』には、秋保電鉄と仙台市電に関する資料が多数掲載されています。

江戸時代末ころの大橋。橋の西のたもとに番所が見える（矢印の部分）
『慶応元年仙台城下図屏風』（部分）　仙台市博物館蔵

せんだい 今 昔 大橋のむかしといま

仙台市内を流れる広瀬川に架かる大橋。
市街と仙台城とを結ぶその橋は、
江戸時代には武士の登城に利用されました。
その後何度も架け替えられましたが、
現在でも多くの人や車が往来しています。
今回はその大橋の歴史についてご紹介します。

仙台橋と大橋

慶長5年（1600）の末、伊達政宗は新しい居城・仙台城とその城下町の建設にとりかかり、翌年早々から工事を始めました。その年の末に新しい城と城下町を隔てる広瀬川に架けられたのが50間の長さをもつ仙台橋です。この頃は6尺5寸を1間とすることが多いので、仙台橋の長さは100m弱であったと推定されます。この橋の欄干に取り付けられた擬宝珠には、政宗の治める領国が中国の伝説の聖王・堯の治世下に劣らないほど繁栄するようにとの願いと抱負をこめた銘文が刻みこまれました。

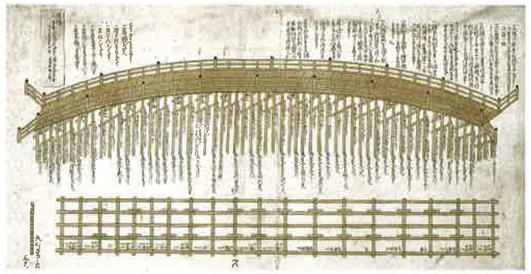
ところで仙台城の研究が進むにつれて、政宗が仙台城を築いた当初の城の登り口は、現在櫓が復原されている大手門の場所ではなく、追廻から巽門～清水門～沢門と通じる道ではないかとの説が有力になってきました。これまでは仙台橋が大橋のことと理解されてきましたが、城への登り口が違うとすると、それにつながる橋の位置も大橋の場所とは異なる可能性も考えられます。実際、本吉郡荒戸浜（宮城県志津川町）の滝沢不動の境内にあった杉の大木25本を、「大橋」を造るために伐採して仙台へ運んだという慶長14年（1609）の古文書が残されています。仙台橋と大橋は同じものなのか、またその位置はどうであったか、今後に残された大きな課題と言えましょう。

江戸時代の大橋

江戸時代の大橋は、何度も洪水で流され、そのたびに架け替えられてきました。『封内風土記』によると、江戸時代中期の大橋は長さ64間（約120m）、幅2丈5尺（約8m）の堂々たる規模を誇っていました。

仙台城側の橋のたもとには番所があって、橋を往来する人々を監視していました。というのも、大橋を渡った川内一帯は「丸の内」すなわち仙台城の一角と認識されていたからです。大橋のたもとは本丸と同じような石垣で護岸されていましたが、ここが崩れた時は、仙台城と同じく修復には幕府の許可が必要でした。

したがって、旅行者などは原則として大橋を渡って川内に立ち入ることは禁じられていました。もっとも、元禄2年（1689）に仙台を訪れた芭蕉と門人の曽良は大橋を渡って仙台城の間近を通り過ぎているようですので、きちんとした案内人に同行してもらうなどすれば、渡れないこともなかったようです。



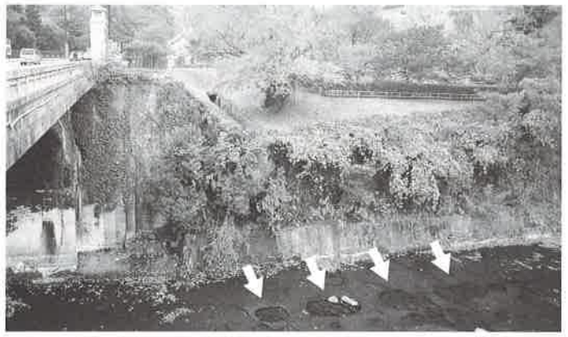
江戸時代後期の大橋の図面。寸法などが詳細に記されている
『御修覆帳』（部分）　宮城県図書館蔵

鉄橋となった大橋

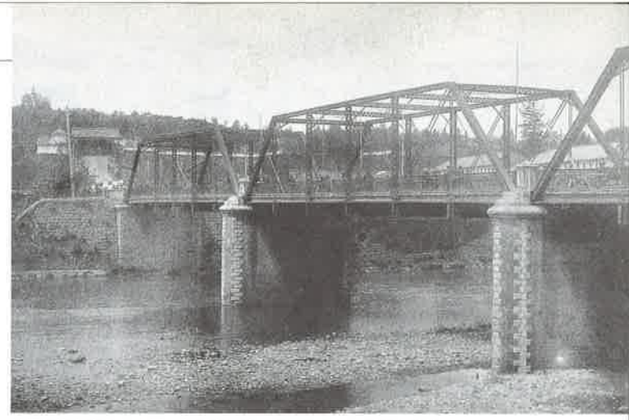
明治維新後、仙台城跡は陸軍の一大拠点として、東北鎮台、さらに第二師団が置かれました。そうした時代の流れの中、明治22年（1889）9月の大洪水で流失した大橋は、軍の意向もありベルギーから材料をわざわざ輸入し、強固な鉄橋として再建されました。

この時、水流に対する抵抗力を持たせるという理由などから大橋は江戸時代以来の位置からやや下流に場所を変えて架け替えられました。大橋から大手門へ至る坂道も、屈曲していましたが、この時まっすぐの道に改められました。

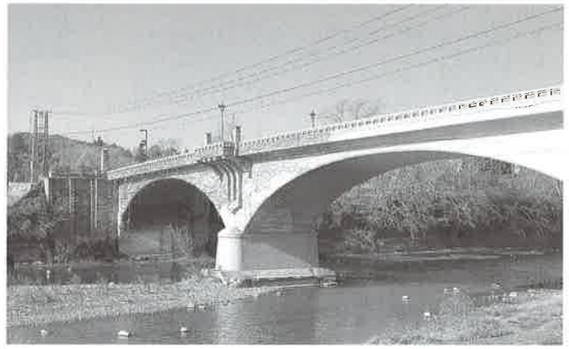
いま、大橋から広瀬川の上流側を見下ろすと、川底に大きな穴をいくつか見ることができます。これがかつての大橋の橋脚の痕跡なのです。



大橋の上流側に残るかつての橋脚跡
（矢印の部分）



鉄橋に姿を変えた大橋。左手奥に建っているのが大手門と脇櫓



現在の大橋のようす

鉄筋コンクリートの大橋

新しい大橋は、最先端の技術で造られた鉄橋でした。しかし、完成後40年を経ると老朽化が目立つようになり、新たに鉄筋コンクリートで造り直されることになりました。昭和13年（1938）9月に完成したこの橋こそ、今も立派に機能している大橋なのです。

長さ約116m、幅約11mで和風の意匠をふんだんに取り入れて造られたこの橋は、歴代の大橋でもっとも長命な橋となっています。60年以上にわたる激動の歴史を物語るようにつる草で覆われている大橋は、今も市街地と川内・八木山方面を結ぶ交通の大動脈として、また未来への架け橋として働き続けているのです。

『市史せんだい』のお知らせ

『市史せんだい』は、昨年度の市史編さん事業の報告をはじめ、さまざまな角度から仙台の歴史をとりあげる特集と研究ノート・論文・史料紹介などによって、最新の研究成果をいちはやく紹介するものです。これまで仙台の環境に関するもの、選挙法改正と市民生活のかかわり、開拓と開発の問題、防災や燃料など生活に密着した話題を提供してきました。また、年1回行われる市史セミナーの要旨も随時紹介しています。

第13号の特集は「仙台の書籍をめぐる事情」。座談会「仙台の出版事情」と仙台CIE図書館についての研究ノートを掲載、市史セミナー「文書から見た伊達政宗」の要旨や慶長遣欧使節関係の新出資料も紹介しています。

『市史せんだい』は仙台市博物館2階売店でお求めいただけます。

●1冊900円（税込み）
●Vol.1、2、4、7は品切れとなっております。

施設探訪　東北大学附属図書館

仙台市史で使いたい写真や資料が博物館にないとき、必要なものはよそからお借りします。また、資料が見つかれば調査に出かけたりもします。このコーナーでは市史編さん事業の過程で訪れた施設をご紹介します。

東北大学附属図書館は本館と4つの分館で構成されています。今回は川内キャンパス（青葉区）の本館をご紹介します。

同図書館の蔵書は膨大で、本館だけで約250万点を収蔵しています。その中には、国宝『史記』『類聚国史』やコレクション『漱石文庫』など貴重な資料も多数収蔵されています。

一般の方に同図書館について知っていただく機会として、蔵書をエントランスホールで展示する常設展のほか、毎年秋にはテーマを設けて企画展（例年10月末から10日間）が開かれます。

また、ホームページも充実しており、蔵書検索はもちろん、パソコンの画面上で資料を見ることができます。

なお、仙台市博物館では、同図書館所蔵の資料の中から130点余りを紹介する企画展『国宝「史記」から漱石原稿まで－東北大学附属図書館の名品－』を開催しております（10月30日から12月21日まで）。

交通　仙台駅前バスプール9番から青葉通経由青葉城址循環、青葉台、成田山、宮教大行きに乗車、扇坂停留所下車徒歩3分

東北大学附属図書館本館
〒980-8576 仙台市青葉区川内　東北大学附属図書館
TEL 022-217-5943（メインカウンター）
http://www.library.tohoku.ac.jp/
開館時間　月～金　9：00～21：00　ただし長期休業期間は17：00閉館　土日祝　10：00～17：00

史実が語る伊達騒動の顛末は…

通史編4　近世2

A5判600頁　オールカラー
定価3、000円（本体2、858円）

「十八日、公（こう）、故（ゆえ）アリ御逼塞（ごひっそく）」

仙台藩三代藩主伊達綱宗の逼塞がもととなり、大老邸での刃傷事件にまで発展した伊達騒動。四代藩主綱村の治世を経て、事件後におとずれた深刻な財政難、藩主・重臣の対立という危機に対し、五代藩主吉村は財政再建に挑みます。江戸時代中期の藩政の動向に加え、仙台城下や村々での多彩な生活の様子を紹介します。

三〇〇点以上にのぼる豊富な図版をオールカラーで掲載し、たいへん見やすく、読みやすくなっております。

『伽羅先代萩　床下の場』仙台市博物館蔵

仙台藩の礎を築くこととなる時期の政宗、その人物像にせまる

資料編11　伊達政宗文書2

A5判550頁　別冊写真集付き
定価4、000円（本体3、810円）

激動の二四年間―豊臣政権から徳川幕府の確立まで

近世大名の仲間入りをした伊達政宗は、天下人豊臣秀吉や徳川家康、あるいは諸国の大名たちとのかかわりの中で仙台藩を築いていきます。本書では文禄元年（一五九二）から元和元年（一六一五）までの二四年間に政宗が発給した九八六点の文書を紹介します。

また、写真図版三九九点と政宗が使用した花押、印章を収録した写真集が別冊でついており、より理解を深めることができます。

『大坂夏の陣図屏風』（複製）仙台市博物館蔵

仙台の歴史を完全収録　各分野ごと続々登場

直接お求めの方　県内主要書店でお求めになれます。

配送をご希望の方　電話・FAXで宮城県教科書供給所へお申し込みください。

発売元　宮城県教科書供給所
〒983-0034
仙台市宮城野区扇町一丁目6-3
TEL:022-235-7181
FAX:022-235-7183

お問い合わせ先
仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862
仙台市青葉区川内三の丸跡
TEL:022-225-3074
FAX:022-216-1830

既刊好評発売中

続刊予定
◎通史編／近世3・近代1～2・現代1～2
◎資料編／近代現代3～4・伊達政宗文書3～4・仙台藩の文学芸能
◎特別編／城館・慶長遣欧使節

【通史編２】古代中世
【通史編３】近世1
【通史編４】近世2
【資料編１】古代中世
【資料編２】近世1　藩政
【資料編３】近世2　城下町
【資料編４】近世3　村落
【資料編５】近代現代1　交通建設
【資料編６】近代現代2　産業経済
【資料編11】伊達政宗文書2
【特別編１】自然
【特別編３】美術工芸
【特別編４】市民生活
【特別編５】板碑
【特別編６】民俗

通史編　3,000円(本体2,858円)
資料編　4,000円(本体3,810円)
特別編　6,000円(本体5,715円)
※板碑のみ 5,000円(本体4,762円)
1冊ずつお求めになれます

【通史編１】原始（販売停止）
【資料編10】伊達政宗文書1（完売）
【特別編２】考古資料（販売停止）

仙台市史　でまえ講座

市史編さん室では、市内各地にある市民センターと共催で、年に2回「仙台市史でまえ講座」を開催しています。これは仙台市史の執筆者がその地域の歴史をテーマに講演を行うものです。

去る9月20日（土曜日）、今年2度目、通算7回目となるでまえ講座を西多賀市民センター（太白区）を会場に開催しました。6月に行われた前回同様に雨模様の天気でしたが、事前にご応募いただいた約90名の方にご参加いただきました。

来年度の予定につきましては、今後『仙台市政だより』などでお知らせいたします。

せんだい市史通信 第11号

発行年月日／平成15年11月15日
編集・発行／仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862　仙台市青葉区川内三の丸跡
TEL／022-225-3074　FAX／022-216-1830
URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum

R100
古紙配合率100%白色度85%再生紙を使用しています